

厚生環境教育委員会行政視察報告

厚生環境教育委員会委員長 松川 峰生

- 【視察日程】 令和7年11月13日（木）～15日（土）
- 【視察委員】 松川 峰生 委員長 石田 強 副委員長
市原 隆生 委員 加藤 信康 委員
穴井 宏二 委員 森 大輔 委員
小野 正明 委員 美馬 恭子 委員
- 【視察地】 熊本県熊本市、宮崎県都城市
- 【調査事項】 熊本県立図書館：「図書館と郷土・歴史物展示」について
熊本博物館：「郷土・歴史物展示」について
都城市立図書館：「地域の活性化と図書館の在り方」について

1. 「図書館と郷土・歴史物展示」について

視察先：熊本県熊本市（熊本県立図書館）

(1) 視察の目的

令和8年開館予定の別府市の新図書館は、「地域・郷土資料館」「交流サロン」といった複合的に機能を持つ設計がなされている。今回視察対象とした熊本県立図書館も同じように、図書館としての機能以外に、郷土資料や歴史物展示等の施設が併設されているため、図書館の運営体制・空間設計・利用者支援の仕組みを研究し、新図書館の取組や改善等に活かすための調査研究おこなうものである。

(2) 施設の概要

熊本県立図書館には、「くまもと文学・歴史館」と「こども本の森熊本」が併設されており、3つのカテゴリで運営されている複合施設である。

また、「温知館」という愛称で、多くの県民に利用されている。

○熊本県立図書館

蔵書数：約116万冊、電子書籍9,000冊

開館：1896年（明治29年）9月

実績：R6年度は開館日288日に対し、24万人利用、18万冊の貸出実績。

熊本県立図書館は「水前寺江津湖公園」の敷地内に建てられた3階建ての建物で、自然豊かな環境の中、読書を楽しむことができる施設となっており、また「熊本市立総合体育館」がすぐ近くにあり、文学とスポーツが一体となった地域となっている。

1階には子ども図書室があり、読み聞かせなどの企画が実施されている。

2階、3階には書籍や資料の閲覧室や、ラウンジ（勉強スペース）があり、

幅広い層が利用している。

○くまもと文学・歴史館（熊本県立図書館内に併設）

所蔵数：古文書類、文学資料など数万点（現在非公開）

開館：1985年（昭和60年）10月

○こども本の森 熊本（熊本県立図書館敷地内に併設）

蔵書数：絵本など計1万冊

開館：2024年（令和6年）4月

(3) 運営の方針（4つの基本方針）

熊本県立図書館の運営は、平成31年（2019年）3月に策定した『熊本県立図書館の新たな運営基本方針～知恵と力を生み出す「知の拠点」へ～』に沿って事業の実施に努めている。

また、このことに伴い、さらに4つの基本方針を軸に施策を展開し、年度ごとに成果や課題の検証を行なうとともに、取組の改善を図りながら、県民や利用者のニーズに対応できるようサービスの充実に努めている。

< 1 > 熊本の暮らしを支える

熊本における「図書館の図書館」として、市町村立図書館等との連携のもと、全県域を対象にした、県民の暮らしを豊かにするための読書の推進等につながるサービスを提供する。

また、子育てや医療、福祉等の生活上の課題等の解決を支援するため、情報の面から県民の暮らしを支える。

< 2 > 熊本の学びを支える

熊本で暮らす人々や熊本で働く人々が、仕事を円滑に進めるために必要とする知的ニーズへの対応や、熊本県民や県外・海外の人々の、熊本をより深く理解するために行う学びの活動についてのサービスの充実を図る。

< 3 > 熊本の文化を発信する

所蔵する古文書等の歴史資料に加え、くまもと文学・歴史館（旧熊本近代文学館）がこれまでに収集・保存してきた熊本ゆかりの近代文学資料など、熊本の文学と歴史に関わる貴重な資料を確実に未来に継承するための取組を進める。

また、熊本ゆかりの人々による文学作品の数々や約6万点に及ぶ古文書を中心とした数多くの歴史資料などを広く県内外に発信する取組の充実を図る。

< 4 > 熊本の未来を創造する

子どもたちの感性を磨き、思考力や表現力を高め、創造する力を培うための読書活動を推進するとともに、人生をよりよく生きる力と熊本の将来を担う力を身につけた子どもの育成につながる取組や、市町村立図書館・大学図書館等の関係職員の資質や技能の向上につながる研修等の取組を推進する。

(4) 質疑応答

Q1：電子図書、デジタルアーカイブの導入状況と利用者の反応は。

A 1 : 令和6年3月から導入し、電子書籍は現在約9,000点になっている。
また、熊本県立図書館では他の図書館との差別化として「教育支援型」に舵をきっており、学生の調べ学習や、大人の「知りたい」の手助けとなる資料を優先的に取り扱っている。
令和6年度の閲覧実績は、アクセス数が75,718件。令和7年度は10月末時点でアクセス数が41,623件となっている。
また、窓口で電子図書館の利用についての問い合わせの件数も増えてきており、県民に少しずつ浸透が図られていると感じている。
デジタルアーカイブについては、地図・絵図が548点、古文書が259点、雑誌コレクション（創刊号等の価値があるもの）を181点公開している。

Q 2 : 郷土資料の収集やそれらの展示についてはどのように企画しているのか。

A 2 : 収集については、熊本県ゆかりの作家や作品を中心に、熊本県が保管することが適切だと判断されるものを中心に収集している。
また、展示については作家や作品の記念の年、歴史的事象があった年、地域性やテーマ等をバランスよく検討するようにしている。

Q 3 : 市立図書館等との役割分担や連携について、実施していることは。

A 3 : 収集する書籍や資料性に差別化を図っている。県立図書館と市立図書館はどちらも欠けることができないと考えており、それぞれが収集する資料や書籍等を差別化することで、包括的に資料提供のサービスができると考えている。
連携については、図書館関係職員を対象とした研修会を主催している。また、市町村立図書館や公民館図書室、学校図書館等に「配本」をおこなっている。その配本をおこなうための連携協定を県内の市町村と結んでいる。

Q 4 : 高齢者や障がい者など多様な利用者に対し、アクセス面や館内移動の面で何か取り組んでいることは。

A 4 : アクセス面では、障がい等の配慮が必要な方については、図書館敷地内の専用駐車場を利用できるようにしている。館内移動については、点字ブロックを設置することで、バリアフリー化を図っている。

Q 5 : 子どもだけの利用について、何か注意していることはあるか。

A 5 : 親子連れで来館する場合はほとんどなので、特に規定は設けていない。
ただ、迷子等の可能性はあるので、その都度職員が気づく範囲で見守りや声かけをおこなっている。

Q 6 : 専門司書の配置やスキルアップのための研修体制はどうなっているか。

A 6：司書数は正職員が 12 名、会計年度職員は 17 名で、窓口対応等の運営をしている。毎月最終週の金曜日を休館日とし、職員向け研修を実施している。

Q 7：ボランティアや学生インターンとの協働事例は。

A 7：こども図書室、こども本の森熊本で、毎月 4 回ほどボランティア団体による読み聞かせ会をおこなっている。現在、読み聞かせについては 12 団体の登録がある。

Q 8：県内の小中学校・大学・企業などとの連携事例は。

A 8：高校と授業連携をおこなっている。例えば「黒船来航」がテーマであった際は、本図書館の会議室で授業をおこなった後、くまもと文学・歴史観に移動し、「熊本における黒船来航はどういう影響があったのか」という視点で、黒船に関する歴史書物等の展示会をおこなうという取組をおこなった。大学とはまだ連携事例はないが、先日「熊本県立図書館の電子図書について連携ができないか」ということで大学から申し出を受けており、現在調整している。

Q 9：相当な貸出数となっているが、今人気な分野はどういった傾向があるか。

A 9：多少の傾向があるわけではなく、満遍なく貸出しているという印象。

(5) 視察の成果（視察参加者の考察）

◆ 松川 峰生 委員長

熊本県立図書館は約 116 万冊の蔵書を有し、熊本で生まれた作家や漫画作品を集めた専用展示が非常に魅力的であった。

郷土文化を体系的に紹介することで、地域への愛着を深め、観光資源としても発信できる可能性を感じた。

「こども本の森熊本」は、木材を使った開放的な空間で、施設全体が「本 × 体験」で構成されており、子どもにとって読書が特別な体験になる設計がされている点を新図書館でも応用できればと感じた。

別府市としても、温泉・文化・歴史を「見える化」する展示や、子どもの学びと地域文化がつながる場所づくりが求められると感じた。

図書館を地域の文化的ハブ拠点として整備するヒントを多く得ることができた。

◆ 石田 強 副委員長

熊本ゆかりの漫画や作家を集めた専用コーナーが印象的であった。文化資源を活かし、読書への興味を自然に引き出す工夫が随所に見られた。

「こども本の森熊本」は、建築空間そのものが“本と子どもをつなぐ仕掛け”になっており、子どもたちが座る・寝転ぶ・登るなど、自由に読書できる空間設計が

特徴的だった。スタッフのサポートや研修プログラム等も充実しており、職員向けの環境づくりが徹底されていたことも感心した。

両施設に共通していたのは、「空間そのものが学びを誘発する設計」である点であったと感じている。別府市の新図書館構想においても、子どもの自由な発想を育むスペースや、読書を楽しむ仕掛けづくりが重要であると感じた。

◆ 市原 隆生 委員

県立の施設なので、図書館の規模や蔵書数において一桁違うという致し方ない部分があるが、別府市の図書館については蔵書の展示スペース等で独自のコンセプト下で特色を出せば良いのではないかと感じた。その点、新図書館の一見図書館とは見えない佇まいは大変に評価できると思う。

図書の貸し出し方法については、紙本・電子本に関わらず処理の仕方が確立・定着していた。地方の図書館が取り組む課題は、「その土地や地方にしかない文化・歴史的資料を整理して配信し、市民はもちろん全国どこからでもその図書館にアクセスさえすれば、その地方にしかない、あるいは独自の情報が得られる仕組みを用意することであると感じた。

別府市においては、温泉に関する様々な情報や資料・現存していないものも含めた歴史的建造物とその背景の史実及び物語、更には火山や数多く確認されている活断層等に関わる資料があげられる。

3月に開館予定の新図書館が、学びの場の提供だけでなく、温泉地に関わる歴史や文化、防災の情報を提供できる拠点になる必要性を感じた。

◆ 加藤 信康 委員

歴史のある都市の中心に位置した図書館であり、県立であることから比較することは難しいが、電子図書館や図書・資料の貸し借り等での県立図書館との連携の必要性については、別府市においても同様に県立図書館との役割分担等の協議を進め、蔵書数にこだわらない上手な運営を期待する。

県内すべての中学校、高校教諭に図書館IDを付与しているとのことで、教諭の立場としても図書館を利用しやすいのではないかなと思える。別府市新図書館においても各学校による図書館利用や、学生グループの利用などを自主的に考えてもらう事で誘導策となり得る。

熊本県立図書館は、くまもと・文学歴史館とこども本の森熊本の3つの施設が集まっているということで集客力があるため、別府市でも歴史博物館的機能や子供図書館機能は、企画イベントや隣接する美術館との連携を検討すべきである。また民間子供図書館との連携も検討できると考える。

◆ 穴井 宏二 委員

熊本県立図書館に併設された「こども本の森熊本」に設置された書籍を確認したが、主に中学生までのジャンルの本があり、子育て関連本もあり充実した内容となって

いた。また、赤ちゃんを対象としている懇談会も実施され、若い世代の憩いの場となっていることを体感できた。

2階3階の閲覧室にある大活字本や視聴覚資料、新聞、雑誌、行政関係、そして郷土の資料も確認したが、歴史的な価値が大きく、まさに「熊本県立図書館でしか見ることができない」書籍の数々であった。

イベント関連では、くまもと文学・歴史館での佐藤館長の連続講演会が大好評であるそうだが、学生サポートボランティアや寄付も募り、様々なイベントや広報、宮崎名誉館長の youtube での紹介動画の公開、周りの江津湖のホテルのイベントとの連携等をうまく活用していることが理由になっていると感じた。

本だけでなく、様々な年齢層に訴え、図書館に気軽に来館し、本と共に何か楽しめる取り組みが大事である。

◆ 森 大輔 委員

熊本県立図書館は約 116 万冊の蔵書を持ち、歴史的・文化的にも充実した都市の図書館のあり方を感じた。県立であることから規模的に別府市と比較することは難しいところはあるが、本来の図書館の役割である知的好奇心を育て、学びの機会を創出する重要性を改めて認識した。

また、新たな施設「こども本の森熊本」については、従来の図書館機能に加え、子どもから大人まで自由な発想を育む空間づくりや、学びを促す体験型の新たな図書館のあり方を示しており、新図書館にも応用できるのではないかと感じた。

今回の視察を参考にすれば、別府市の新図書館においても、従来の図書館機能だけでなく、五感を刺激する体験づくりができるといいのではないかと考える。

◆ 小野 正明 委員

広大な館内に約 116 万冊の蔵書を備え、学習・児童書スペース、郷土資料などがバランスよく配置されており、特に、熊本ゆかりの漫画・作家のコーナーは「地域の魅力を読書で伝える」優れた取組であると感じた。

「こども本の森熊本」は、木を使った温かい空間設計が印象的で、段差や壁面本棚など、子どもが「身体で本と触れ合う」環境が整えられていた。利用者の滞在時間を自然に伸ばせる構造で、図書館の新しいあり方を示していた。

今回の視察を通して、図書館は単なる「本の貸出施設」から、「学びの体験を提供する場」へ進化していることを実感した。別府市でも、温泉・自然環境・地域文化を生かした図書館づくりに活かせる視点が多く得られ、大変有意義な視察であった。

◆ 美馬 恭子 委員

市立と県立の違いはあるが、「図書館のテーマ」として市が深めるべき点で、しっかり県立図書館と連携していくことが必要だと感じた。別府市は、温泉地としての資料や歴史など、市立図書館としての資料を保管すること、それを県内の他の図書館と共有していくことが今後必要である。

「こども本の森熊本」が併設されており、市民にとって図書館がより身近になる第一歩。子どもたちにとっても親にとっても敷居が低くなり身近になることで、今後の図書館のあり方も変わってくるのではと感じた。

(6) 視察の様子



熊本県立図書館職員による概要説明



こども本の森熊本を視察



熊本・地域史の展示



歴史館職員が作成した手書き案内図等

2. 「郷土・歴史物展示」について（実地視察）

視察先：熊本県熊本市（熊本博物館）

(1) 視察の目的

熊本博物館は、「未来へつなぐ熊本の記憶（集める・伝える・創造する）」を全体のテーマとし、熊本の歴史や文化、人と自然との深い関わりを示しながら、地域・郷土の歩みを楽しく分かりやすく伝え、未来へ継承することを目的としている。令和8年開館予定の別府市の新図書館には、「地域・郷土資料館」が併設されることから、熊本博物館のコンセプトを視察し、郷土資料に関する展示等について学ぶものである。

(2) 施設の概要

郷土の自然系・人文系資料を有する博物館として昭和 27 年（1952 年）に設立、いくつかの変遷を経て昭和 53 年（1978 年）に現在の地（中央区古京町）に新築移転されている。4,100 点に及ぶ郷土・歴史資料を展示しており、さらに恐竜や人気アニメのプラネタリウムといった若年層に向けた企画やイベントが多いことも特徴である。また、近隣には熊本城、旧細川刑部邸、こども文化会館等の施設もあり、重要施設がコンパクトにまとめられた地域設計になっている。

(3) 視察の様子



熊本博物館 現地視察前



企画展に寄せられた小学生の感想

3. 「地域の活性化と図書館の在り方」について

視察先：宮崎県都城市（都城市立図書館）

(1) 視察の目的

今回視察対象とした都城市立図書館は、街中のにぎわい創出のため、保健センターや子どもルーム、イベント広場等の様々な機能を持つ大型の複合施設内に設置されている。

街中のにぎわいと図書館の関連性、また館内の空間設計や滞在性向上、にぎわいづくりの取組を調査し、新図書館の取組や改善等に活かすための調査研究おこなう。

(2) 施設の概要

この中核施設は「Ma l l ma l l（まるまる）」という名称であり、これは図書館以外に併設されている全ての施設を含めた総称である。

都城市では、平成 23 年に大型百貨店が閉店したことにより、その施設の再利用等についての課題があったが、その後図書館への改修工事等がなされ、平成 30 年 4 月に当中核施設がオープンした。

旧百貨店を図書館に改修したことにより、約 31 億円の整備コスト縮減（同規模図書館の新設と比較）となり、旧図書館の約 3 倍の規模に拡大された。利用者数も年間 100 万人達成しており、非常に注目されている図書館である。

（図書館以外の併設施設は下記の通り）

○未来創造ステーション

市民や企業等が利用できる会議室・セミナー室の貸し出しおこなっている。

○まちなか広場

全天候型の多目的広場で、年間約 200 件のイベント等が開催されている。

○まちなか交流センター

1 階では、会議やセミナー用の会議室の貸し出し、また、市民が利用できる「まちなかキッチン」があり、料理教室等が開催されている。

2 階には多目的室があり、平日は保健センターの幼児健診等が開かれるスペースとなっている。

○保健センター

幼児健診、母子手帳の交付、健康相談等を実施している。

○都城市子育て世代活動支援センター(愛称：ふれぴか)

子育て世代のさまざまな活動を支援に資する事業を総合的に実施する施設。

小学校 3 年生までの親子で遊べる「プレイルーム」、乳幼児の一時預かりなどを実施している。

○バス待合所

(3) 質疑応答

Q1：指定管理との連携において、運営上の課題や成功要因、市としての関わりはどのようなになっているのか。

A1：都城市では、開館の 1 年半前に管理会社と契約し、開館後の図書館の指定管理業務に加え、設計時の空間の使い方等、管理者を整備段階から関与させることで、管理運営の円滑化と、一体感のある図書館運営を構築できたことで、開館後もスムーズに業務運営できたのが成功要因と考えている。

Q2：開館から数年経つが、利用者層の変化や来館者数の推移は。

A2：当初は中高年層の利用が多かったが、近年は近隣の中高生や、「ふれぴか」を利用した親子が続けて図書館を利用したりと、利用者層が若年層まで拡大していると認識している。

利用者数については、年間 100 万～110 万人を推移している。

Q3：若年層や子育て世代の利用を促すために工夫している点は。

A3：子どもが利用するエリアや親子で過ごすエリア等、利用者層ごとに滞在するエリアを明確にすることや、リビングのようにつろげる空間にするなどの取組をおこなっている。

Q4：SNSやイベントを通じた情報発信について工夫している点は。

A4：インスタグラムや市のフェイスブック等を利用して、イベントの告知等をしている。

Q5：図書館を中心にどう地域のにぎわいを進めているか。

A5：年間 200 件ほどのイベントが行われている点や、健康診断等の目的で、「ぶれぴか」や保健センターの利用のために家族連れが多く来館しており、街中のにぎわいが戻ってきていると実感している。

Q6：多彩な行事や図書館運営を通じて、学校教育や市民活動の中で感じる効果や影響等は。

A6：市内外の小学生の施設見学、市内外の中学生・高校生がインターンシップや職場体験で本図書館を選んでくれている。
また、本市では全ての市立小中学校に「図書館サポーター制度」を導入しており、図書館に保管されている資料を学校の授業で活用できるようにしている。

Q7：図書館をまちの学びの拠点として機能させるために意識していることは。

A7：「学び」はインプットだけでなく、アウトプットも重要であるということを意識して図書館運営をおこなっている。

Q8：駐車場の台数、利用料金、違法駐車への対応は。

A8：本図書館の附帯駐車場と、近くの大型駐車場を合わせるとおよそ 700 台。これがイベント等で満車になるのは年に 4～5 回ほど。
料金は 60 分で 100 円だが、Mall Mall 内の施設の利用者は、1 施設利用につき 3 時間無料になる。
違法駐車は今のところ発生していない。

(4) 視察の成果（視察参加者の考察）

◆ 松川 峰生 委員長

視察日が土曜日ということもあり、学生の学習利用・家族連れ・若い世代の長時間滞在が多く、図書館として非常に高い稼働率を誇っていた点に注目した。

館内にはカフェが併設され、飲食をしながら過ごせる点や、ビジネス相談・創業支援が図書館と連動して提供されており、「滞在型図書館」として運営していることが、高い稼働率となるポイントであると理解した。

図書館を核とした複合施設として、「知」・「学び」・「経済」・「子育て」を一体的に支える運営が確立されており、現代の図書館の新しい姿を示していた。

都城市は盆地で地形が平坦であるため、自転車で来館する市民が非常に多いという特徴があった。来館手段として自転車利用が一般的であり、その点も高い稼働率を支えていると感じた。

一方で、別府市は坂道が多く、市民が自転車で気軽に来館できる地形ではない。したがって、都城モデルを参考にする際には、駐車場の確保やアクセス動線の強化がより重要になると考えられる。

別府市の新図書館整備においても、多機能・多世代型の運営を取り入れつつ、「別府の地形・交通に合ったアクセス計画」を併せて検討する必要があると強く感じた。

◆ 石田 強 副委員長

訪問日は土曜日であったため、館内は子ども連れの家族や勉強する中高生・大学生で大変にぎわっていた。読書だけでなく、「学ぶ・遊ぶ・過ごす」が一体となった図書館であるという雰囲気を実感した。

年間 200 以上のイベントが企画されており、そのイベントへの来場者を、図書館や地域の商店などに流れるようにする「動線」を意識して運営していることなどの話を直接聞くことができ、その結果、図書館が“まちの交流拠点”として機能している点が大変印象深く感心した。

都城市立図書館は、読書・学習だけでなく、育児支援や市民活動、創業支援まで一体となった複合的な市民の居場所づくりを実現していた。

別府市においても、「図書館 × 子育て支援 × 創業支援 × 交流」のモデルは大いに参考になると感じた。

◆ 市原 隆生 委員

ショッピングモールとして建てられたものが、市立の図書館として生まれ変わった点にまず驚いた。最初に強く感じたことは、駅から近いことと周囲が平坦な土地に囲まれていることによる「自転車での利用者が多い」ということであった。

元がショッピングモールであることから、図書館部分では使い切れないスペースがあり、その利用の仕方が様々な若い年代の方をたくさん集める仕掛けになっていることが大変すばらしく感じた。特に、屋根付きスペース等の指定管理者条件として、年間 200 回以上のイベントを行うことを課している点である。乳幼児と母親、小・中・高生と各年代に向けたイベントを打ってにぎわいが絶えないようにしている点には感心した。

図書館で本の貸し出し自体に料金をいただくわけにはいかないが、しかしそこに多くの人が集まることで「にぎわい」が生まれれば、キッチンカー等の多くの業者が関わってくることになり、その先に市税の増収に繋がるならば、素晴らしいことである。

図書館の運営費を少しでも抑える工夫、努力を怠ってはいけないが、サービスが低下することもあってはならない。

新図書館も、落ち着いたスペースを提供すると同時に、今回入り口を増設し別府公園とも連携をとりながら、新しいにぎわいの創出を考える必要性を実感した。

◆ 加藤 信康 委員

中心市街地活性化事業として成功した事例として興味深い。近隣に5つの学校施設があることによる学生の勉強の場として若者が集まる拠点としての図書館と、若いお母さんが安心して子育てが出来る拠点となる保健センターを融合することで、若い世代が集まりやすい空間が構成されている。若い世代が今必要としている施設を分散せずに集めたことで活力が出ていると感じる。

また、図書館をただ静かに本を読む・調べ物をする場としてだけでなく、様々な機能を必要としている世代に提供することによって、人が集まりやすい施設とすることの可能性が見える。さらに図書館にルールがないことによる、来館者自らの気づきや、社会の常識を学ぶ場として機能していることは、現館長の人間性が大きく影響していると感じた。

別府市の新図書館も直営部分に加えて指定管理者によるスペースや事業が予定されているが、希望している事業者が都城市立図書館には何度も訪れているとのことなので、良いところはすべて学び導入する運営がなされることを期待したい。また新図書館担当部署の職員も都城市立図書館での視察を行い、運営体制の知識を高めることを望む。

◆ 穴井 宏二 委員

都城市立図書館は、ショッピングモール跡地を再開発してリニューアルして作られた図書館であり、新設と比較して約30億円余のコスト削減ができたという説明に感心した。

図書館は非常に入りやすい雰囲気であり、1階には相談デスクや検索機等がある。中央には吹き抜けの空間と階段があり、凜とした雰囲気であったにも関わらず、「静かにして過ごさなければならない」という概念を求めているということであった。これは「なぜ静かにするのか」といった常識やマナーについて自発的に考えるようにするための社会教育的な「仕掛け」であり、これはこれからの重要なポイントとなるであろうと強く感じた。

2階にはティーンズスタジオなど若者向けのコーナーや、保健センターや保育の施設も併設され、小さな子どもから大人まで過ごせる工夫が随所にされていた。こういった工夫を、中心市街地活性化と結びつけて行った所が、成功の一つの鍵であると実感した。

◆ 森 大輔 委員

都城市立図書館は図書館としての機能だけでなく、中心市街地を活性化する役割を担っている部分が注目すべき点である。

この図書館から学ぶことは、事業を行うときは明確な構想が大切であるという点である。子どもたちから大人まで時間を過ごしたいと思わせる空間づくりをはじめ、学生が勉強する場として集まれる拠点、お母さんたちが安心して子育てできる拠点、先輩世代がゆっくりできる拠点など、それぞれの世代が求める居場所を創出するという明確な構想が、来館者数の増加に表れていると大変感銘を受けた。

別府市の図書館にも明確な構想が必要ではないかと改めて感じる。

◆ 小野 正明 委員

来館者数が多い土曜日の視察となり、子ども連れの家族だけでなく、学習スペースには若者が多く、図書館が「学びの場・居場所」としてしっかり機能していたことが印象的であった。

カフェを併設することで、訪れた市民が長時間滞在できる環境が整備されているほか、創業支援や相談機能が図書館と自然に融合していた。

年間 200 本以上のイベント開催により、図書館は常に活気があり、市民が自発的に集まる「まちのリビング」としての役割を果たしている。

さらに隣の「子育て世代活動支援センター ぴかぴか」では、一時保育だけでなく遊びスペースや交流スペースが整備され、親子の憩いの場となっていた。

都城市立図書館は、空間設計の工夫と複合機能によって、市民が自然と集まり、学び・遊び・活動する拠点となっていた。

にぎわいづくりと生活密着型サービスを両立しており、別府市の図書館づくりにとって非常に示唆の多い視察であった。

◆ 美馬 恭子 委員

新しい形の図書館として注目を集めている図書館であったので、有意義に視察することができた。「生きがい広がる図書館」「ひとりひとりが大事な物を見つけていくために」とのコンセプトが本当に見えたと感じている。

子育て支援と一体になった「子育て世代活動センター・保健センター・まちなか交流センター」が図書館と連携されており、若い世代も安心して活用できるのは大切なことだと思う。中高生が、勉強に使える場所づくりも大切であるが、広い世代の方々が使える図書館も同時に考えていくことも必要だとも感じた。

図書館は、資料・専門書の豊富さも大変重要である。そのためには、一定の世代が集うことが必要になるが、あらゆる世代が勉強や研究のために気兼ねなく訪れることができる図書館を目指したいと感じた。

図書館は、その市が見えてくる基本。公的管理・維持が必要になるが、指定管理者制度とした場合でも、市としっかり協議をした上で運営していく必要がある。

大変有意義な視察であった。

(4) 視察の様子



都城市立図書館の中央広場①



都城市立図書館の中央広場②



二次元コードを利用したインデックス



図書館内視察の様子